

## お正月の記念写真に思う

母君が 心づくしの 晴着きて  
友達集ふ 正月の午後

昭和初め頃のあらたまったお正月の雰囲気がよく伝わるこの和歌は、旧中野村(現在の広野地区北部)の女子青年団の文集に掲載された作品です。この文集は、中野村の出身で昭和7(1932)年に20歳で神戸市内に嫁がれた女性のご家族から、一枚の写真と、これらにまつわる思い出の文章とともに寄贈いただきました。大正後半頃に組織された女子青年団については不明な部分が多いのですが、この文集はその活動を示す貴重な史料です。

女学生達の集合写真には、背景となった建物の玄関の表札に「加茂青・・・」の文字が見えます。寄せられた文面や学校の存続期間などからみて、表札は中野村立加茂小学校(現在の加茂神社付近)に併置された加茂青年訓練所で、写真の女学生は併設の加茂農業補習学校女子部の生徒だと考えられます。女学生達の年齢は10代半ばで、昭和3(1928)年頃の撮影です。



中野村農業補習学校女子部の記念写真

一見この写真は卒業記念かと思われそうですが、よく見ると校舎の玄関には注連縄しめなわが写っています。かつての学校や役場などでは、お正月の記念撮影が盛んだったようですが、いつの頃からか役場では記念撮影そのものがなくなり、学校では新学期早々の撮影が多くなりました。かつて新年を迎えることは、「数え年」に象徴されるように、無事に一年を過ごし、さらに新たな生命を得てよわい齢を重ねることと考えられていました。ですから記念撮影が「新年」から「新年度」へと移ってきたことは、1年やその節目に対する考え方が、「生命」主体の正月から「社会」主体の4月前後へと移行してきたことを示すとも言えます。

もとの所蔵者の方は、神戸での戦災と震災とを乗り越えて手元に残ったこの文集や写真を、生涯慈しんでおられたそうです。お正月に対する考え方は、まちの風情とともにこの80年の間に随分と変化したことでしょう。いのちの大切さが改めて叫ばれる今、あたらしい年(歳)を迎えられたことに感謝する記念日としての「昔のお正月」に思いをはせることもまた、意義あることではないでしょうか。